

明星学園では、親や職員の期待を、ちょこっとばかり裏切るような生き方を選択する姿を「プチ非行」と呼んで、精神的な自立の始まりを示す良き兆候として捉えています。

定型発達の女の子でいえば、〈親に内緒で、あるいは反対されているのに、ピアスの穴を開けてきてしまう〉とか、〈お友だち同士だけで映画館へ行ってはいけないと言われていたのに、嘘をついて出かけてしまう〉というような状況を指し示します。

この「プチ非行」の姿は、〈親〉という主体と〈子〉という主体とが、異なった考えを持ち、行動をするようになったという、分離した二つの人格の状況を如実に示すがゆえに、精神的な自立の兆候となり得るわけです。

【エピソード1】

A子さんは35才になる今日まで、母親には、甘いものを食べることについて制限を受けています。母親にしても一貫した見通しがあって、制限をしているわけではないのですが、例えばおまんじゅうに手を出そうとすれば、「太るから駄目よ」という言葉が、オートマティックに口をついて出てしまいます。確かにA子さんは小太りではあります。食べ過ぎればさらに太るでしょう。そして、彼女はその指示を健気にも守ります。

さて、その彼女、職員との外出買い物で、全くお菓子類を購入することができません。絶対甘いものが好きなのに…です。一年、二年とそんな買い物風景が繰り返されました。そして三年目、彼女は大型店の鯛焼き屋の前で初めて立ち止まったのです。そしてじっと鯛焼きを見つめます。ついにやって来たのです。「プチ非行」の日が。職員はその姿を心から応

援します。「A子さん、鯛焼き、大好きだよね。思い切って買っていこう。買ったことお母さんには絶対言わないよ、お母さんの言う通り生きなくたっていいんだよ。あなたはあなたの人生をあなたらしく生きればいいんだよ。」彼女の目は、喜びと不安で真ん丸くなっている。

【エピソード2】

B男さんに聞く。「今度の散髪どうしようか、髪の毛伸ばすのもいいんじゃない？」彼は答える。「ぼくは、短いのが好きなの～」、確かに彼の発言は正しい。だって彼は50年間、丸坊主頭であるのだから。

何年かの月日が流れた。「髭を伸ばすの～」そう彼は言い出して、職員が髭をそるのを拒否した。髭を剃ったり伸ばしたり、そんな一年が経過した頃、彼は言った。「髪の毛、長く伸ばしたいの～」。それから半年、今彼は、一日の多くの時間を鏡を覗きこんでは、櫛で髪の毛を梳かし続けている。もう5～6センチも伸びただろうか？その表情は陶酔の心地である。

80才を越えた父親との電話の第一声は、今でも「お風呂入ったの～」である。それは紛れも無い「ぼくはお風呂に入っている良い子ですよ」という意味なのだが、丸坊主も同じように、彼にとっては「良い子」の象徴であったのだ。先日の帰省で、父親は、息子の長髪が気に入らなかったとみえ、バリカンで側頭部から刈り上げた。それほど坊主頭は、父親からの至上命令だったのである。帰園後の彼に聞いた。「髪の毛どうするの？」彼の答えは「伸ばすの」の即答だった。職員は多いにその「プチ非行」をこれからも応援していくつもりだ。あなたはあなたらしく生きればいいんだよと。